

令和四年度 一般入学試験（A日程） 国語

徳山看護専門学校

受験番号
氏名
得点

※解答はすべて解答欄に記入してください。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えてください。

①親譲りの<sup>学</sup>で小供の時から損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無茶をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事はできない。弱虫やーい。とはやしたからである。人におぶさって帰ってきた時、おやじが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かすやつがあるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

小説「坊っちゃん」の書き出しである。主人公「坊ちゃん」は絵に描いたような江戸っ子に生まれついた。だが、子供のころはとかくその一面だけが目立つもの。けんかつ早くていたずら大好き、で当然家族近所の<sup>やっかいもの</sup>厄介者。亡くなる直前の母親にまで愛想をつかされてしまった。

長じて、通りすがりに生徒募集広告を見て物理学校に。卒業後、勧められるままに（旧制）中学校の数学教師としてはるばる四国へ。月給四十円。来てみたら、坊っちゃんが小柄ゆえなめられたか、それとも、これが新米教師への恒例行事か。初めての宿直の晩、生徒があの手この手で夜討ちをかけてくる。坊っちゃんより大柄もいっばいいるが、そこは江戸っ子先生、真っ向から受けて大立回り。教師たる者が、となる。その他いろいろあったが、元来ものにこだわらず、あつという間に忘れる得な性分。校長以下にあだ名をつけてひそかに楽しんでいる。最後は、幕末江戸っ子の同志、会津出身の坊っちゃん命名「山嵐」と意気投合。けしからぬ教頭「赤シャツ」一派をやっつける大暴れをして、そのままさつさと東京に引き上げてきてしまった。着任たったのひと月。その痛快さ、小気味のよさがたまらない。ところが、この小説にはもうひとすじ、静かな物語が流れている。

坊っちゃんのうちに清（きよ）という女性がいた。清は口の悪い坊っちゃんに言わせれば「婆さん」だが、元は由緒ある身分であったらしい。ところが、時は江戸から明治へ。時代のあおりを受けて、坊っちゃんの家には雇われ住み込みで奉公するようなことになつてしまつた。だから「坊っちゃん」と清は呼ぶのである。作者は語らないが、清という女性には深い人生があつたであろう。

その清だけが、どういうわけか坊っちゃんを可愛がり、二言目にはその性格を当の本人が不審がるほど誉めるのである。あげく、坊っちゃん、あなたは将来きつと独立して玄関のある立派な家を構える人になるでしょう。その時はどうぞ私を置いてください、と頼むのだった。坊っちゃんも清に言われるとなんとなくそうなりそうな気がして、いいよと答えている。

しかし、そのうち坊っちゃんの両親が他界し、清は甥の家に移り、坊っちゃんは清に別れを告げ四国に渡つたわけだが、若いうちは、とかく人間世界の表と裏に敏感だ。特に、坊っちゃんのような正義漢は。ところが、そういう世間を見るたびに、ふと東京にいる清を思い出すことが多くなつていく。そうか、おれはいつも清というきれいな鏡に映る世間を見て育ってきたんだ。

「汽船は夜六時の出帆だった。船が岸を去れば去るほどいい心持がした。」と書いた後、作者は小説「坊っちゃん」をこう結ぶ。

②清のことを話すのを忘れていた。……おれが東京へ着いて、かばんを下げたまま、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つてきてくださったと涙をぼたぼたと落とした。おれもあまりうれしかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと言つた。その後、ある人の世話で鉄道の技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくとも十分に満足の様子であつたが、気の毒な事に今年の二月肺炎にかかつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで、坊っちゃんお願いですから清が死んだら、坊っちゃんの御寺へ埋めてください。お墓の中で坊っちゃんの来るのを楽しみに待つておりますと言つた。だから、清の墓は小日向の養源寺にある。

これが「坊っちゃん」を流れるもうひとすじの物語だ。

だが、読み終わつてもう一つ気が付いた。それは、自分が作つた主人公「坊っちゃん」への、作者の慈愛の目だ。作者の思いがよく表れるという書き出し文をもう一度読んでみよう。これは、とても厄介者として冷たく主人公を見ている目ではない。頼もしく見つめているではないか。作者は坊っちゃんが可愛くてたまらないのだ。ひよつとして、江戸っ子坊っちゃんは作者のことかもしれない。（引用した原文は、読みやすくするため一部書き換えたところがあります。）

問1 この小説の作者名を次の中から選んでください。

- 【ア 紫式部 イ 夏目漱石 ウ 宮沢賢治】

問2 明治文学の双璧として、坊っちゃんの作者と並び称される文学者を次の中から選んでください。

- 【ア 芥川龍之介 イ 志賀直哉 ウ 森鷗外】

問3 書き出し文である枠囲みがしてある引用原文①の□に入ると思われる言葉を次の中から選んでください。

- 【ア 無鉄砲 イ のんきもの ウ お調子者】

問4 全文を意味の上から三段落に分け、第二段落、第三段落の最初の一文節を書いてください。

問5 筆者は文章を書き終わるにあたって、引用原文①について「これは、とても厄介者として冷たく主人公を見ている目ではない。頼もしく見つけているではないか。」と書いていますが、作者が見つけている坊っちゃんの頼もしさを二つ、あなたの言葉で書いてください。

問6 この文章を読んだ範囲で、あなたは坊っちゃんという人物のどこに魅力を感じますか。一〇〇字以内で書いてください。箇条書きではなく、感想文として文章で答えてください。

問題二 次の三首の短歌の作者を左の【1 作者】の枠内から、また、同じ作者の作だとあなたが思う歌を【2 同じ作者】によるとあなたが思う歌【の枠内から選んでください。なお、本来三行書きの歌もありますが一行書きにしています。

○ その子二十櫛はたちくしにながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

作者

①

同じ作者の歌

②

○ いのちなき砂のかなしさよさらさらと握れば指のあひだより落つ

作者

③

同じ作者の歌

④

○ 「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

作者

⑤

同じ作者の歌

⑥

【1 作者】

ア 石川啄木

イ 与謝野晶子

ウ 俵万智

【2 同じ作者によるとあなたが思う歌】

エ 東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹かにとたはむる  
オ 四百円にて吾われのものとなりたるを知らん顔して咲くバラの花  
カ 清水きよみずへ祇園ぎおんをよぎる桜月夜あこよひ逢ふ人みなうつくしき

問題三 俳句には季節を表す「季語」を使います。次の俳句の季語を書き出し、季節を書いてください。

○ をりとりてはらりとおもきすすきかな (飯田蛇笏いひだだこくつ)

季語

①

季節

②

○ 手毬てまりうた唱なかなしきことをうつくしく (高浜虚子たかはまきよし)

季語

③

季節

④

問題四 次の熟語の読みを書いてください。

- ① 匹敵 ② 凝固 ③ 皆無 ④ 緩和 ⑤ 群青 ⑥ 縫合